



## 「我以外皆我師」～ 限界は空

標題の6文字はどう読むのか? と思った人もいるだろう。「われ/いかい/みな/わが/し」と読み、「どんな人や事柄からでも、学ぶものはある。」という意味である。『宮本武蔵』や『三国志』などを書いた吉川英治(1892~1962)の座右の銘と記憶している。

自身を振り返っても、これまでいろいろな人と出会い、それぞれに学ぶことが多くあった。ある無口な人からは物静かな「落ち着き」を、雄弁な人からは「説明の分かりやすさ」を、自分と「合わない」と思う人からは、自分もそう思われぬよう気を付ける、というようなことを…。いわゆる「反面教師」も含め、出会って意味のない人など一人もいなかった。**学ぼうと思えば誰からでも、どんな些細なことからも学ぶものはある**と確信する。



人は誰でも、自分自身が大切である。そして、自分を包む「殻」が割れないよう固くすることを考えがちである。しかし、少し考えてみれば分かることだが、自分が壊れないようにするにはもう一つ別の方法がある——逆に柔らかくする、という方法である。**異なるものを跳ね返すのではなく、その出会いを「吸収する」姿勢をもつ**ことである。

自分を大切にすることは、ただただ殻を破られないよう「守る」ことではないだろう。むしろ、それまでの**自分の殻を「破り続ける」**ことが自分を「守る」ことになるのだと気付いてほしい。なぜなら、人は、**いつの時も変化・成長する「今」を**生きているからである。たえず変化することは、生命として極めて自然なこと。変化が止まるのは、生命の終わりを意味する。生きるとは、それまでの自分を「上書きし続ける」ことに他ならない。

ある「もの」の苦しみ——ある時、その「もの」は、いきなり異物を自分の体の中に入れられてしまう。異物を体内に抱えるという耐えがたい痛みから逃れるため、この「もの」はどう反応する? 吐き出そうとする? そうではなく、その「もの」は、異物に対して自分の内側と同じ成分を発しながら、その表面積を最小限にすべく球状にして、体の一部にしようとするのである。そしてその痛みの先に、私たちが呼ぶところの「真珠」ができていく。あの丸い宝石は、こうした真珠貝(あこや貝)の苦しみの所産なのである。

日常生活の中で新たに出会うものを大切に、しっかり受け止めるようにしよう。異なるものを受け止め、それを自分の中に保持し続けることは、恐らく違和感や痛みを伴うものである。しかしその痛みは、やがて「自分色」の輝きを放つ宝石の結晶ともなるものである。日々成長する**今の君たちは、自分で限界を設定してはならない**。後で振り返り、自分が膨らむことを諦めたところ、その地点が結果として限界だったと気づくのである。

The sky is your limit.

君たちの限界は、空 ——つまり限りのないもの

